

森林管理問題に学生がかかわることの意味 －神戸市下唐櫃農業協同組合有林での試み－

兵庫県立大学3回生 三俣ゼミナール

山崎美智雄、長郷天太、山口玲奈、堀田菜月、山口優輝、細井敏生、岸本遼、柏木翔吾、後呂直人、赤井直生

1. 研究の背景と調査目的

海外から安価な木材が輸入されるようになってから輸入木材に比べて高価な国産材の消費量・需要量は減っている。また、産業構造の高度化により、利益の少ない林業は衰退し続け、産業全体に対する林業の占める割合は0.1%となり、林業従事者も減り続けている。

兵庫県には神戸市・芦屋市・西宮市・宝塚市にわたり、東西30kmの規模を有する六甲山がある。六甲山は居住域との距離が近く関わりの深い都市近郊林である。

林業の衰退は我々三俣ゼミナールの活動の場の一つ、兵庫県神戸市にある神戸市下唐櫃林産農業協同組合有林においても同じく衰退の一途を辿っている。そんな下唐櫃林産農業組合ないし伊勢講山と筆者ら三俣ゼミナールの関わりは2014年10月26日に始まり5年目を迎えていた。筆者らの中には同組合の蔵に入って古い文献を読んだり、住民の方々に聞き取り調査を行ったり、山林作業に参加して林業体験をするなど、実際に多様な学びを通じた関係を構築してきた。筆者ら2017年度三俣ゼミナール3回生もまた山林散策をはじめ、山林作業等の参加で筆者らは経済学部に所属しているがゆえに欠如していた林業に対する知識を実際の作業、行為を通じて理解を深めてきた。

上述の通り兵庫県立大学三俣ゼミナールは学生の入れ替わりはあるものの、5年にわたって下唐櫃林産農業協同組合や下唐櫃まちづくり協議会、伊勢講山と関わってきた。各世代の学生は、上述の通りテキストなどでは容易に知りえない森林生態、人工林施業などについて、組合の助力、指導を仰ぎながら実際に山林作業を体験することで山林についての経験・知識を得ている。また、現地の人と交流し、聞き取り調査をすることで研究に大いに役立てている。ここで筆者らは疑問を抱いた。「このような学びを通じた交流は、筆者ら学び手だけが恩恵を受けているのではないか」という点と、「組合にとって私達とのかかわりは何らかの前向きな意味を持っているのか」という点である。この疑問の解明を通じ、外部者（とりわけ学生）のどのようなかかわりが山村の問題解決の一助になるのかを考えてみる、それが本稿の狙いである。換言すれば、学生が山林・山林を管理する組合に関わることの可能性と課題について検討することが本稿の目的である。

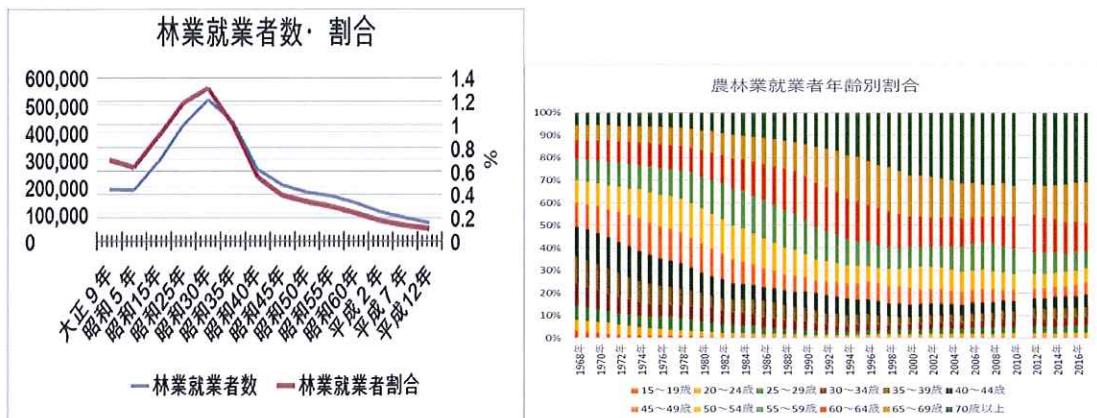
2. 研究目的と調査方法

本稿では文献・資料考証とフィールドワーク、聞き取り調査、六甲山材の利活用についての意見交換会への参加に基づいて、学生が山林・山林を管理する組合に関わることの可能性と課題について言及する。

実施した聞き取り調査では、下唐櫃林産農業協同組合・下唐櫃まちづくり協議会の方々に電話での聞き取りを行った（2018年2月15日、16日）。フィールド調査では、伊勢講山の様子を観察・記録すると共に、伊勢講山で行われる山初めや間伐などの参与観察を通じ、お役の実態を記録した。電話による聞き取り調査も上記以外にも数回実施し（計3日）、上述した研究課題の解明に取り組んだ。また、下唐櫃地区の魅力を発信するために三俣ゼミOBの行われた「写真展」の運営スタッフに写真展の反響について、聞き取りを行った。また、六甲山材の利活用に関する意見交換会では神戸市造園協力会、もりの木プロジェクト、神戸学生森林隊、神戸市の造園職、神戸大学教授など、山林に詳しい様々な方が集まった意見交換会に参加し、学生が、いかに森林問題の解決に資する関わりができるかを考えた。

3. 結果

林業就業者数・割合、農林業就業者年齢別割合をグラフにまとめると以下のようになる。



※ 総務省統計局労働力調査より、筆者作成

データから読み取れるように、農林業は人手不足と高齢化が進んでいる。林業単独での就業者数・割合は平成12年以降ほぼ横ばいとなっている。今後も改善されないようであれば、これまで以上に高齢化・人手不足は加速していくと考えられる。

またフィールドワークによる調査では以下のことが明らかになった。

- ・ 作業に参加して分かったこと



※共に筆者撮影

上の写真は山林作業に参加した時の写真である。この日は散らばっている人の腕ほどの太さの木の枝を機械で碎きチップにした。左の写真がチップにする前で、右の写真がチップにした後である。一見してわかるように、好き放題に散らばっていた木々が細かくチップになることで山の視界が開け、すっきりした印象を受ける。また地域の方々は「チップを畑にまいたら栄養がありそうだ。」と口にしていた。しかし、大量のチップを人力のみで運びだすには膨大な人手が必要になるので実際は厳しいとも言っており、チップは樹木の根本において栄養として活用することにしていた。このチップにカブトムシが産卵することも期待できるのだという。



※共に筆者撮影

左の写真でも見て取れるが山道は非常に狭く、傾斜も急なため、大きな重機による運搬を行うことができない。山道を整備するにも予算がなく、整備したとしても利益がほぼ生まれるのが現状である。伊勢講山の近隣の山林は都市山防災林整備整備造成業務として兵庫県の予算として整備中であった。右の写真は木材搬出のために新たに整備された山道である。写真のように搬出された木材は兵庫県の森林林業技術センターで六甲山材としての活用法を研究するために利用されるという。なお、神戸市には同等の研究施設はない。しかし、薪として販売するなどの試験的な利活用法は検討されていた。

実際に参加することで搬出作業が大変な重労働であり、人手不足であることも身をもって理解した。またこれらの事業はほとんどが補助金に頼っている現状である。しかし、木材やチップも現時点では収入源にはならず、財源が確立していないため、現在の資金がなくなってしまった後が問題である。（作業のモチベーションを欠いていることが大きな問題だと、改めて認識した。）

また、我々は下唐櫃地区の組合員である吉田繁廣氏、吉田進氏、芝氏の3名にアンケート調査を依頼し、実施した。以下がその結果である。

- ・ アンケート調査で分かったこと

①5年間我々三俣ゼミ生がかかわってきたことに意味・効果・変化があったのか、また、これから関わり続けることへの展望は。という質問に対しては、「まだ目に見える変化はないが、行動次第で徐々に変化は現れ始めるだろう。5年間様々な取り組みによって、地域の状況、課題、改善策が明確になってきた。言うまでもなく、交流が深まってきたことも、これから行動推進に大きな効果がある。」という意見や「地域外への影響力は未だ弱く、

継続的な取り組みが必要であると考えられるため、卒業後も機会があれば是非参加してほしい。」といった意見があった。

②大学生によるアプローチにはどんなことを期待するか。という質問には「若い力で楽しめる企画を実施してほしい」という意見や、「活動で実際に体験してくれるのはありがたいが、整備作業にももっと協力してもらえれば」「現在作業に携わっているだけだが、計画の段階から携わっても面白いと思う」という意見など、企画立案と活動への積極的参加に期待する声があった。

③どういったことがモチベーションにつながるのか。という質問に対しては、「山を災害から守り、多くの人に六甲山を知ってほしい、大事にしてほしいという気持ちがモチベーションの一つ。」という意見があった。しかし一方で「今年からはお金を払うことで免除されるようになったが、昨年まではお役によって強制されていた為に、地域としてのモチベーションは依然低い状態にあると感じる。」という声も挙がっていた。

④現状伊勢講山で行われているお役・山林作業の活動内容については、「山林作業から間伐や枝打ち、森林伐採をして、3年間で2haの道路作成や、竹チップ作成やしいたけの栽培、ハイキングロードの整備、団栗や花梨の植林等の活動を行っている。今後の活動予定は地域住民で相談しているが、近々山の案内人を立てる事が決まっている。」とのことであった。

⑤伊勢講山でどのようなことを実施したいのか。という質問には、「大きな目標として、みんなが集れるような場所を作ろうと思っている。その為に、地域の交流地や飯盒炊爨の場などの憩いの場を作り、地域密着で大人から子どもまで参加することができる山林作業の体験ができる機会も設けたいが、それを行う為にも人手が必要であるため、現段階では少し厳しい。」という意見があった。

⑥神戸市からの援助が今年で終わるが取り組みを変えていくのか。という質問に対しては、「試験的に薪を販売するなどして売り上げを資金に回しているが、諸費用がかかるため利益は多くない。市からの援助金200万円を使い切ってしまったので、今後は椎茸、油の販売等で独立した財政基盤を作りたいと考えている。」という未来を見据えた意見もあった。

また、私たちは、下唐櫃写真展の運営に携わったスタッフにも以下の聞き取りを行った。

①写真展に訪れた人々の中に対する非組合員の割合はどうだったか。という質問でわかつたのは、驚いたことに一名を除き残り全員が非組合員だったということである。

②写真展を通して山に興味を持ってもらえたか。という質問に対しては、「地域の奥さん方や子連れの親子が来ていた。地域についてもっとよく知りたくて来たというひともいた。」という回答を得た。そして、③現時点では組合員の増加がみられないのは、写真展にどういった問題があったからだと思うか といった質問には、「山に興味を持ってもらうためのきっかけにはなっているとは思うけれど、まだ入り口の段階。こう言ったイベントの回数をもっと増やしていくなければ、山の担い手の増加は見込めないのでないか。」との意見があった。

地域の方々の答えはそれぞれであったが、大学生が山林作業などに参加することには共通して肯定的な意見をいただいた。また、山林作業に参加するのみに留まらず、写真展のようにアイディアマンとして地域を盛り上げる企画を実施してほしいなど、さらなるかかわりを求める意見もあった。写真展スタッフへの聞き取り調査からわかるように、お役に参加しない層の関心を高めることには、入り口の段階ではあるが効果も見られている。そして、いかにして大学生と地域との関わりやイベント開催を継続していくか。その資金的・時間的問題も、クリアすべき大きな課題となっている。

4. 考察

以上の調査から、下唐櫃地区の森林管理における問題点が明らかになった。日本全国で拡大する少子化・高齢化は確実に下唐櫃地区においても進んでおり、産業構造の変化も相まって集落の人手は減少し、森林の適切な維持が困難になっている。行政からの振興予算も一時的なものであり、森林の財としての価値が下落している今日、新たなアイデアはあれど、自足的に維持費を貯うことができる段階には至っていない。我々学生が森林に入つて作業の手伝いをすることは一時的な補助にはなりえるが、技術的に介入の困難な作業も多い。学生の入れ替わりや距離の問題から、長期的かつある程度連続的な維持活動に中心的に関わることもまた困難である。行政のような金銭面からの補助を行うことも現実として可能とは言えない。結局のところアンケート調査でも触れられていたように、より多くの地域住民が森林へかかわるようになることが重要といえるだろう。若年層も含めた現状山林への関心の低い人たちを巻き込んで、地域全体で森林に関わり、管理していくことが理想の形であるといえる。

ここで本稿の命題である「学生が山林・山林を管理する組合に関わることの可能性」について考えてみる。我々学生による活動は金銭的援助やマンパワーでの援助ではなく、地域住民、とりわけ山への関心が低い方々の山での活動を促す働きかけの場面において効果的に働くではないかと考える。我々学生はこれまでの山林での作業、聞き取りから山林の知識を得ており魅力・価値（自然体験・自分たちの里山）および重要性（防災機能・集落維持機能）についても理解を深めている。そこで得られた知識を活用し、学生（組合と一緒にすると理想的）側から関心の低い住民に参加を促すようなアプローチを行うことで活動への参加の一助となると考える。実際に三俣ゼミ OB である大学院生の川添は下唐櫃の風景を写真に収め、地域の公民館で写真展を開き、外部の人間が見た地域の良さを普及するという形で活動を行ってきた。この活動は、写真展開催を通じた地域内での新しい交流の場を形づくった。このような活動は地域にかかわり魅力を発信しようという学生ならではの発想・取組であるといえる。だが、このような山林作業以外での活動は写真展のほかになされておらず、聞き取り調査で分かったように「写真展などで（山に関心のなかったひとにも）多少興味は持ってもらっているが、行動にはあまり移されていない」と地域の方々は感じているようであった。学生の関わりが山への関心が低いほかの住民まで波及しきっていない理由について考察すると、下唐櫃地区の組合から学生側への期待はまだそう高く

なく、外部からの参加者という印象を持たれていることのほか、写真展以外で未だ山への関心の低い住民たちと学生との接点がほとんどない状態であることが課題として見えてくる。一度の開催でもある程度の関心を持ってもらうことはできたが、より発展的な地域のつながりを構築していくけるような交流の場にしていくためには、参加しやすい開けた場づくりをし、回数を重ね、山への関心をさらに高めていくことと同時に住民同士で砕けた関係を築くことが重要である。その結果として地域の一員としての自覚が育ち、山に入ってみよう、お役に参加してみようという気持ちになるのではないだろうか。

5. まとめ

下唐櫃の住民の森林への関心は高いとは言えず、整備作業では常に人手不足に悩まされているのが現状である。整備に必要な予算が不足しており、自力で賄える財源の乏しさから作業のモチベーションを維持することも難しい。

このような現状を開拓し地域を活性化させるため、私たち大学生にできることは、地域の中にはない発想をもちいて、山に関心のなかった人を巻き込んでいくことである。現在は、写真展という形でしかイベントを開くことができていないが、これから様々な可能性を追求していきたい。また、こうして開いたイベントが、新たな資金源や交流の起点となる可能性にも期待する。そしてなにより自分の地域に関わりたいと思う人が増え、六甲山の景観と安全が守られることに寄与したく思う。

謝辞

この度の調査に関わってくださったすべての方に記して感謝する。

参考文献・資料

資料

- ・総務省統計局労働力調査

www.stat.go.jp/data/roudou/longtime/03roudou.htm

<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0002060048>

- ・総務省統計局国勢調査

https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200521&tstat=000001011777&cycle=0&tclass1=000001011807&result_page=1&second=1&second2=1

文献

- ・晃洋書房「都市と森林」
- ・JC 総研レポート/2015年春/vol.33 卷頭論説①「大学との連携による農山村の再生」
- ・桜出版社「地域ブランドのつくり方と働き方」
- ・三俣ゼミナール卒業論文「都市農山村地域における森林利用と管理—神戸市北区下唐櫃地区の事例から—」
- ・岩波新書「農山村は消滅しない」